

平成 29 年 5 月 10 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370806

研究課題名(和文) 小石家書簡にみる江戸期医学と知識人ネットワークの基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research of Edo period medicine and the intellectual network seen in letters of KOISHI family

研究代表者

有坂 道子 (ARISAKA, MICHIKO)

京都橘大学・文学部・准教授

研究者番号：30303796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世の京都でいち早く蘭医学を取り入れ発展させた医家、小石家に残る88通の医家書簡を解読し、関西における江戸期医療の実態解明と、医家を中心とした知識人ネットワークの意義を明らかにした。本研究により、これまでの医学史で明らかにされていなかった数々の事実を確認し、小石家が京坂医学の中心であっただけでなく、九州を含む西日本の知識人と深く結びつき、当該期の医学界を主導する立場にあったことが明確になった。

研究成果の概要(英文)：88 medical doctor letters left for KOISHI family were deciphered and the significance of the reality explication of Edo period medical treatment and the intellectual network which made the medical doctor the center in Kansai(Kyushu is included) was made clear by this research.

研究分野：日本近世史・文化史

キーワード：江戸期医学 医家書簡 ネットワーク 蘭医学

1. 研究開始当初の背景

(1) 小石元俊は、漢方医学が主流であった江戸時代中期に、京都ではじめて蘭方医学を取り込んだことで著名な医家である。その学塾を究理堂といい、元俊以降も代々医業を受け継ぎ、漢方・蘭方いずれにも通じた医家として、つねに京都医学界の中心にあり、現在も江戸時代と同じ場所で開業している希少な家である。

その究理堂小石家に関しては、伝記的研究である山本四郎『小石元俊』(吉川弘文館、一九六七年)を嚆矢に、『京都の医学史』(京都府医師会、1980年)が、医学史上の位置づけをまとめている。また、現在究理堂文庫に伝わる諸資料の概説目録は、『究理堂の資料と解説』(小石秀夫監修、宮下三郎・多治比郁夫編著、究理堂文庫、1978年、『京都の医学史』資料編にも所収)が知られており、これらが現在にいたるまで研究の基礎となっている。だが、それ以降は個別の研究こそ少なくないものの、究理堂小石家の医療全体を見通した検討はなされて来なかった。

(2) 究理堂文庫には数多くの医家書簡が伝存している。それらを包括的に分析することによって、江戸時代中後期におけるわが国の医学・医療の実態を、従来のような江戸中心ではなく、上方という地域の視点からとらえ直し、あわせて究理堂小石家の広範な知識人交流の広がりや機能、そのネットワークが有した歴史的な意義を明らかにすることができれば、医学史のみならず既存の文化史・社会史研究にも接続することが可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世の京都でいち早く蘭医学を取り入れ発展させた医家、小石家に残る書簡を解読し、関西における江戸期医療の実態解明と、医家を中心とした知識人ネットワークの意義を明らかにすることにある。

小石家には、元俊・元瑞・中蔵の三代にわたる多くの医家書簡が伝存しており、それらの分析によって、近世後期におけるわが国の医学・医療の実態を、関西(九州も含む)の状況を踏まえた視点からとらえ直すとともに、小石家の広範な知識人交流の広がりや機能を検討し、知的活動を支える知識人ネットワークの持つ歴史的意義を解明することを目指す。

3. 研究の方法

本科研では、年3回の定期的な研究会(輪読会)を催し、書簡の徹底的な読み込みを実施した。また、書簡の医学史上の位置づけを検討し、知識人交流・ネットワークの歴史的意義を明らかにするために必要な史料収集、現地調査(福岡・山口・大分)を実施した。各年度の実施概要は以下の通りである。

【平成26(2014)年度】

8月9~10日 輪読会
12月20~21日 輪読会
1月10~11日 史料調査・研究報告会
於：福岡県福岡市・福津市・宮若市・鞍手郡鞍手町
3月21~22日 輪読会

【平成27(2015)年度】

8月8~9日 輪読会
12月22~23日 輪読会
1月30~31日 史料調査・研究報告会
於：山口県山口市・下関市
3月19~20日 輪読会

【平成28(2016)年度】

5月4~5日 輪読会
7月30~31日 輪読会
9月19~20日 輪読会
12月24日~25日 史料調査・研究報告会
於：大分県日田市・大分市・国東市
3月18日 研究総括会議

各輪読会においては、各人が分担して書簡の解読および内容の報告をおこない、会のメンバー全体で検討・討議した。内容の精査を尽くすため、検討事項を含む書簡を中心に5稿まで作成した。

4. 研究成果

本科研では、三年間の研究期間内に、究理堂文庫が現在所蔵する医家・蘭学家23名から小石家に宛てた書簡88通の徹底的な読解をおこなうことができた。そもそも書簡史料は、その性格上、実証の素材として取り扱うさいに困難をとまうが、さしあたり本科研では、記載された事実、および作成年代の確定を精緻におこなうことにつとめた。本科研において、解読をすすめた書簡の差出人は以下の23名通りである。

赤沢寛輔・宇田川玄真・宇田川榕庵・大槻玄沢・緒方洪庵・小田濟川・小野蘭山・桂川甫賢・亀井南冥・小森桃塙・近藤半五郎・斎藤方策・新宮涼庭・杉田玄白・辻出羽守・坪井信道・坪井信良・永富数馬・長与専斎・日野鼎哉・広瀬元恭・箕作阮甫・和田東郭
全体の研究成果として、大きくは以下の3点にまとめられる。

(1) 江戸時代中後期のわが国における医学の実態の解明

本科研の研究による最大のメリットは、医家に残るまとまった書簡史料を扱うことで、これまでの医学史で明らかにされていなかった数々の事実を確認できたことである。そして、究理堂小石家という京都の著名な医家に残された書簡である事実が、以上の価値をさらに高めよう。

小石家に所蔵される書簡は、元俊から元瑞・中蔵・第二郎、すなわち、一八世紀後半

から明治維新期の動乱を越えて長期間、同家累代に及んだものであり、幅広い知己から到来したものである。差出人には、杉田玄白や大槻玄沢をはじめ、当時の医界を代表する著名人が多く、加えて永富数馬など、従来の医学史ではあまり注目されていなかった人物の書簡や、通説の訂正を促す内容を持つ書簡が数多く見つかった。

また、書簡のなかには医学界、とくに蘭方医学に関わる学問研究の動向や政治情勢の変化、本草学（薬学）分野の知識情報などについて、これまで知られていない多くの事実が記されていた。たとえば、代表的な蘭学家の具体的な動き、種痘の導入・公許に関わる状況、蘭方医学とそれに対立する勢力との関係、蘭方医学書の翻訳・出版をめぐる情勢、藩医の動静などであり、検討されるべき様々な論点が含まれている。

従来の医学史、とくに江戸時代中後期以降の蘭方医学に関する研究史は、主として江戸の杉田玄白・大槻玄沢らの系統を中心に実証が進められてきた。一方、江戸蘭学の研究に比して、それ以外の医療状況については、必ずしも研究が進んでいるとはいえない。近年九州に関しては、本科研の研究分担者青木歳幸が佐賀藩の医学史を中心に研究を積み上げ、また、『九州の蘭学』（ヴォルフガング＝ミヒェル・鳥井裕美子・川島真人編、思文閣出版、二〇〇九年）などの精力的な研究も公刊されるようになってきた。そうした状況のなかで、本科研での研究によって、究理堂文庫に亀井南冥をはじめ、九州の医家・知識人との交流を示す貴重な書簡が残されていることがあらたに判明した。たとえば、儒家として知られる南冥が医療活動を活発におこなっていた事実は、たいへん興味深いところである。本科研の取り組みを手がかりに、京都の究理堂小石家を中心とする上方の蘭学が、結節点として重要な位置を占めた事実が明らかとなった。本科研のように、一点ごとの内容を精査することにより、とくにこれまで江戸を中心に検討されていた諸問題を、京都の究理堂小石家のおかれた状況と視点からとらえ直し、さらには九州の医療状況、幕末の医療情勢など、多岐にわたる具体的な内容がみえてきた点も、本科研の大きな成果といえる。

本科研の作業を前提として、当該期の医学史研究が進展し、今後さらにあらたな論点が数多く提示されるはずである。さらには、文化史・社会史・政治史などの関連分野に有益な史料たることは明瞭ゆえ、究理堂小石家の書簡の解読は、学術的にきわめて有意義な位置を占めることとなる。

（２）究理堂小石家を中心とした知識人ネットワークの解明

究理堂小石家の人脈のつながりは、医家に

限らない。意外なほど広範な知識人ネットワークを見出し得る。江戸時代文化史研究のなかで、知識人社会の広がり、あるいはネットワーク研究の重要性については、かなり以前から指摘されてきたことであるが、解明の方法論として、書簡史料をおもな素材とする本科研の取り組みは、きわめて画期的なものと自負する。究理堂小石家という、ひとつの医家に集積された書簡を取り上げ、ネットワークの結節点として同家がどのような役割を果たしたのか、また逆に、同家がネットワークのなかであってどのような影響を受けたのか、交流の内実を検討することで、究理堂小石家を核とした当時の知識人社会の様相、その特徴を明らかにすることが可能となった。

それと同時に、究理堂小石家の書簡にみる知識人ネットワークが、江戸時代後期に急速に展開していった蘭方医学の流れとどのように関わり機能したか、本科研の成果によって、医界と当時の知識人ネットワーク全体との関係を捉え直すことができた。また、究理堂小石家の交遊が医家としての交流のみならず、文人交流を通じてさらなる結びつきをもった事実を踏まえることで、江戸時代中後期以降における医学の展開、およびその特質について、より多面的に把握することも可能となった。

（３）究理堂小石家書簡の史料的価値の確定

究理堂小石家の医家・蘭学家書簡の史料的価値を広く明らかにし、共有するため、本科研では当初、史料集の刊行を予定していた。準備の問題や予算など、諸要因によって、残念ながらそれは実現しなかったが、扱った全88通の書簡史料の翻刻および語句註を、『研究成果報告書 小石家書簡にみる江戸期医学と知識人ネットワークの基礎的研究』にまとめて掲載し、研究全体の成果として公表した。

小石家に伝わる史料群は、個人所蔵であるため、たとえ研究者であっても原史料の閲覧は容易ではなく、責任をもって史料を解読するという点でも難しい問題がある。本科研における書簡の精読によって、小石家書簡がきわめて歴史的価値が高いことを示すことが出来た。

（４）研究の進展に向けて

書簡中の諸事実に関しては、もちろん依然として不明な点、留保されたままの箇所が多く残されている。今後、先行研究はもとより関連資料を詳細に再検討し、あらたな論点の抽出をおこなわねばならない。もとより本科研における作業を前提として、メンバー個々が今後、究理堂に関する学術研究をさらに進めていき、論文等の形で成果を公表していか

なくてはならない。その地道な取り組みこそが医学史研究および江戸時代知識人研究の発展につながるものと考えている。

なお、平成 29 年度中に、本科研の成果による出版物を単行本として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 16 件)

有坂道子、江戸時代における京坂の医学、クロノス、査読無、38、2016、43 - 46

有坂道子、小石家の医学と文学、クロノス、査読無、36、2014、43 - 46

海原亮・三木恵里子、究理堂書簡に見る蘭学者交流の諸相 - 坪井信良の動静をめぐって -、洋学、査読有、19・20 合併号、2015、41 - 65

〔学会発表〕(計 16 件)

青木歳幸、適塾の歴史的評価をめぐって、第 9 回適塾講座、2016.12.3、大阪大学中之島教育センター(大阪市)

青木歳幸、江戸時代の医学と佐賀藩、佐賀大学公開講座、2014.9.28、佐賀市立図書館(佐賀市)

海原亮、三都の医師と医療、三都研究会、2016.6.25、京都文化博物館(京都市)

〔図書〕(計 10 件)

青木歳幸 他、佐賀新聞社、佐賀医人伝、2017、264

青木歳幸 他、岩田書院、幕末佐賀藩の科学技術・下、2016、432(43 - 76)

青木歳幸 他、岩田書院、佐賀学、2014、314(117 - 145)

海原亮、吉川弘文館、江戸時代の医師修業 - 学問・系統・遊学 -、2014、254

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有坂 道子 (ARISAKA Michiko)
京都橘大学・文学部・准教授
研究者番号：3 0 3 0 3 7 9 6

(2) 研究分担者

青木 歳幸 (AOKI Toshiyuki)
佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・特命教授
研究者番号：6 0 4 4 4 8 6 6

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

浅井 允晶 (ASAI Nobuaki)
堺女子短期大学名誉教授・除痘館記念資料室専門委員

正橋 剛二 (MASAHASHI Kouji)
元医療法人白雲会理事長

海原 亮 (UMIHARA Ryo)
住友史料館主任研究員

三木恵里子 (MIKI Eriko)
啓明学院中学校高等学校教諭